

修 報

＜第15号＞

論語素読会会報

(学生感想文特集号)



題字 田久孝翁

学校法人昌平黉
儒学文化研究所

東日本国際大学
いわき短期大学

子曰、

学而時習之、不亦説乎。

（子曰く、学びて時に之を習う、

また説ばしからずや）

学而第一 より



——『修報』という題名は、「学びて時に之を習う」という孔子のことばをもとに、学び修めることを求めつづけていくために、田久孝翁によつて名付けられた——

目次

巻頭言	グローバル社会の草莽掘起	理事長 田久昌次郎	2
学生感想文特集	(私の好きな「論語」の章句)		4
論語素読教室	一般受講生		31

巻頭言

グローバル社会の草莽掘起



学校法人 昌平黌

理事長 田久 昌次郎

この度、論語素読会会報「修報」第十五号が刊行されることに心よりお喜びを申し上げるとともに、素読会関係者のご尽力に敬意を表します。

いま、文春文庫から復刻された大佛次郎（おさらぎ・じろう、一八九七―一九七三）の「天皇の世紀」を手にし、読み耽っています。とは言っても、十二巻に及ぶ大分な歴史書であり、引用が多く文体も現代物に比べると古く読みにくいので、最後まで読了できるかは甚だ自信はありません。ほぼ同時期に発表された司馬

遼太郎の「坂の上の雲」とは、随分と異なる作風であり、坂の上の雲は大衆受けする「歴史小説」とすれば、天皇の世紀は大佛史観ともいえる「史書」の趣きがあります。

読み解くことに難儀ではあるのですが、その時代や世界の動きを俯瞰する確かな視点に驚愕するとともに、維新から一四〇年以上経っても日本人の外庄に対する対処方法は変わらないと考え込んでしまいます。

明治維新は、吉田松陰の「草莽掘起」そうもうくつきに代表される下の者が行った革命であり、尊皇攘夷論から尊皇開国論に変化し、外国列強と争うことなく、「和魂洋才」西洋文明を上手に取り入れた歴史と賞賛され、諸外国からも「維新に学べ」とよく言われます。そして、その素地は江戸時代であり、庶民に至るまで儒学・漢文の素養があったからとも、日本人の器用さ・物まね上手に起因しているとも説明されています。そのような素地・素養があったことは認めるとして、大国清が中華思想を脱しえず、産業革命以後の英国を初めとする欧米列強に飲み込まれる様を間近で見つめながら

も、祖法である鎖国を頑なに守り、攘夷と称し、詭弁を弄してまで外国文化を拒絶した公家や幕閣の頑迷固陋さは、戦後六十年を経て財政破綻を前にしながらも、経済発展を金科玉条のように唱える今の政府にも当てはまるのではないでしょうか。

幕末支配階級の頑迷固陋さがどの様に移り変わるのか、あるいは、変わらずに時代から取り残されていくのか、大佛史観の今後の展開に大変興味を持っています。人間の生き方・道を追求める余り（現代はその逆かと思われますが）、形式主義・旧弊にこだわり、柔軟な発想を排斥する愚をいつ、どの時点で先人は方向転換できたのか。一人の人間の思考方法は、そう大きく変えられるものではない筈で、時代のうねりの中で、トリガーとなったのは何かを、グローバル社会で生きる日本人として考えておくべきように思います。

最近、一部の学生からですが、孔子祭や孔子の教えを学ぶ必要性を問う声が聞かれます。確かに、孔子の言う人生の処世術を身につけても、物を生み出す理論や技術と比べ実益は少ないでしょう。

う。その一方で、海外の人々からは、日本人は地理・歴史・宗教などを含めて自分の国の文化を知らなさすぎると言われます。勿論、孔子の教えは中国の思想ですが、日本の文化・歴史に深く関わっています。自分の家のルーツや地域の文化を知るように、孔子の教えを知ることが日本の存立を理解することに繋がります。

この「修報」が、歴史や文化を振り返り、学生諸君の自己覚知の場となることを期待し巻頭言と致します。



学生感想文特集

私の好きな

「論語」の章句

「子曰く、その鬼に非ずしてこれを祭るは、諂いなり。義を見て為ざるは、勇なきなり」

深澤 明日花

自分の先祖でもないものや、自分が信じていない宗教や神々を祭るのは諂いであり、卑しむべきおべっかである。こうするのが人間として正しい道と知りながら実行しないのは、勇気のない人間（ひきょう者）である。

この章句が一番好きな理由は、現代社会において、義を貫くことの難しさを端的に表しているからである。世の中の多くの人は、

明らかに間違っていることを目の当たりにしても、トラブルに巻きこまれることを避け、見て見ぬ振りをする人が多い。例えば、学校や職場でのいじめ問題を挙げることができる。一人の弱い人を多くの人々が取り囲んで嫌がらせをし、いじている現場を見つけた時、ためらうことなくすぐに間に入って仲裁をする人は極めて稀である。多くの人の場合、周りで見ていてかわいそうだと思っても、下手に関わると今度はいじめの矛先が自分に向かってくるのではないかと恐れ、見て見ぬ振りをしたり、いじめに加担してしまうことがある。内心では悪いことであると自覚していたとしても、自分の身を案じるあまり、正義を貫くことができないのである。

しかし、関わるのが面倒なこと、自分にとって何の利益にもならないこと、かえって不利益にさえなりかねないことでも、正しいことは正しいこととみなし、間違っていることは間違っていることとみなす必要がある。例え周りにいる大部分の人が誤った行動を取っており、自分の立場は少数派であったとしても、恐れることなく自分の意志を貫き通し、正しいことを実行する勇気が求められるのである。

我が国の現代社会においては、経済的に豊かになり、物があふれ、食べ物に困ることは少なくなった。しかし、物質的に恵まれ

た社会になった反面、人としての心の豊かさや愛情は薄れてきたきらいがある。児童虐待や家庭内暴力、親による子殺し、子どもによる親殺しなど、本来なら一番安心して過ごせるはずの家庭内で凶悪な事件が頻発している。まさに家庭崩壊の危機に直面しているといえよう。このような憂慮すべき事態を食い止めるためには、家族の真のあり方を考え直す必要があるのではないだろうか。子どもが生れてから初めての人間関係を築く家庭環境から受ける影響は計り知れない。生まれ育った家庭環境があまりに劣悪であると、子どもは多くの場合情緒的な問題を抱えることとなる。子どもが健全に育つために、養育者の果たすべき役割は大きい。「三つ子の魂百まで」とよく言われるように、小さい頃に培われた人格は年を取ってもなかなか変わらず、生涯を支配するのであるから、養育者の躰は子どもの人生において非常に重要な意味を持つといえる。

残念ながら、現代社会においてきちんとした躰を受けずに大人になっている人がいるという事実は、危惧すべきことである。社会規範を親から教えられることなく、やりたい放題甘やかされて育った子どもは、我慢をすることができず、何かうまくいかないとすぐにキレて周りに八つ当たりをしたり、ひどい時には親にも暴力を振るう子どもがいる。幼い時にきちんとした社会のルール

を教えるということは、子どものその後の将来を大きく左右するといえるであろう。

『論語』は、今から二千五百年以上も前に生れた孔子の言葉であるが、その中で書かれている人としての生き方、円滑な人間関係の築き方、思いやりの心などは、現代社会において今まさに必要とされている知識である。自分の利益を最優先にし、自己中心的、個人主義に走りやすい今日、多くの人が『論語』に親しみ、その中に書かれている章句の正しい意味を理解し、毎日の生活の中で『論語』の精神を実践するなら、世の中はもっと住み良い社会へと変化していくであろう。

『論語』を深く学ぶことで、人としてのあり方や自分を律する強い心を養うことができる。また、周りにいる人一人ひとりがかけがえない貴重な存在であり、みなが平等に生きる権利を有していることを思い起こすことができる。人が人としての正しい道を歩むために、『論語』は非常に重要な道しるべとなっているといえよう。

私自身、「義を見て為ざるは、勇なきなり。」を読む度に、正しいことを常に実行することの難しさを思い知らされる。例えば、誰かを中傷する悪質な噂話を耳にした時、誤った情報を流している人に向かって止めるようにとすることができない。自分の立場

が危うくなることを心配するあまり、どうしても勇気を出して一歩踏み出せない自分がある。しかし孔子は、自分の利益や保身のために勇気を持って行動しないのは卑怯者であると述べている。自分から進んで噂の発信源になったわけではなくても、間違っていると気づきながら何もせずにいたのでは、悪に加担したことになってしまう。今回、『論語』を読んで学んだことは、是非日常生活の場で実践し、行動の指針にしていきたい。

「温故知新」



関 拓 哉

「論語」の中で私が一番気に入っているのは、「故きを温ねて新しきを知る」だ。またの言い方を「温故知新」とも言って、意味は昔のことや古いことをよく研究して、それを参考に、今、突き当たっている問題や、新しいことがらについて考える、という意味である。これは「子曰く、故きを温ねて新しきを知らば、以て師と為すべし」で、「温」は温めるという意味もあり、昔のことをじっくり温めるように調べて行けば、新しいことを知ることができるということである。何故、私がこの言葉を選んだかという

と、新しい事や新しい物作りを始めても、その原点である故きものを大切に、次の世代へと語り継いで行くという孔子の教えと、東洋のもつ精神とに感動したからである。ここで「温故知新」に関係する私の体験を述べてみたい。

私の家は、三年前に新築をし、家のほとんどが新しい物へと変わっている中、私が生まれる前からあったタンスだけは私の部屋に置かれている。小さい頃から毎日使っていたもので、かなり愛着のある物だ。何もかもが新しい家、新しい家具の中に、古いながらも思い出のつまったものがあるというのはとても安心するものだと感じた。二つ目は、新築したばかりの時に両親が買ってきた椅子についてだ。この椅子は見た目からしてずいぶん昔の古い椅子のような形で、すぐに壊れそうな椅子なのだ。しかし、一度座ってみると、とても座り心地がよく、背もたれによりかかると、椅子全体で体重を包み込んでくれるような感触があり、とても驚いた。

この時、私は形が古いというだけで、その椅子を軽蔑した自分を恥じた。その椅子には古い形ながらも、今まで感じた事のない新しい座りの良さが備わっており、この椅子を作った職人は「温故知新」そのものを作っているようだと実感した。

この体験を通して世の中を見してみると、最近が開発が進み、緑

が破壊されている。今の日本人は新しいもののばかり作ることを考えていて、日本そのものの良さを残そうとしていないように思う。もっと、昔から語り継がれたものを残し、それに学ぶべきだと思う。今後、私は「温故知新」の精神を持ち、大学での生活や、社会に出た時にも、過去のことを学び、それを生かし、新しいことへと挑戦していきたいと思う。

「秀でて実らざる者あり」

黒 須 友里花

才能があっても実らない人がいる。人は努力が必要だ、という意味です。何故これを選んだかというと、才能がどんなにあっても、1%の努力でもしないと、何事にも結果が出ないし、才能がなくても努力し続けている人は、最後にはしっかり結果を残すことができるからです。

私は五歳から柔道をやっています。兄弟三人みんな柔道をしています。兄がいて妹がいます。妹は初めから柔道の素質があり、体格にも恵まれています。逆に、兄と私は、才能がなければ、体格にも恵まれていませんでした。周りの子に比べれば、体重も少

ないし、体つきも細く、柔道体型ではない、いろいろな人言われてきました。

小学生の時には一番小さく、男の子よりも小さく、女の中でも体つきが小さく、伸び悩んでいました。でも、体が小さいならスタイル、みんなとは違うスタイルでやったら勝てるんじゃないのかと自分なりに考えました。最初からのスタートだったので、全く勝てませんでした。でも毎日毎日残って、自分なりに研究したり、先生に聞いたりして、みんなが帰った後も練習していました。少ししてから結果がついてきて、少しずつ勝てるようになりました。何故勝てるようになったのか、人並以上に練習して、勝ちたい、勝たないと、と言う気持ちがあったから勝てたんだと思います。

中学に上がって、強い学校に入学し、周りがみんな強くて、今まで努力してきたのに勝てなく、歯が立ちませんでした。周りにはみんな自分より努力していて、上で勝てる人は、才能もあるけれど、人の練習量をこなしたあと、見えない所でも努力していたから勝てるのだと思います。中学では、人並にしか練習をこなしていなかったから結果が出ませんでした。

高校では、人並以上に努力する事を意識し、練習でも周りの子よりこなす努力をしました。努力した結果、勝つ事ができました。

才能があるからと言って練習しない人に、才能はついてこないけれど、努力して勝てた事がとても嬉しかったです。

大学に入学し、いろいろな人を見てきました。才能もあり、努力もして、どんな練習も手を抜く事がなく真剣に取り組む人、強いからと言って手を抜いて、相手を馬鹿にして練習しない人、体格が恵まれてなくても必死でついて行こうとして、投げられても何度も立ち向かって行く人、勝てないからと言って、全てをあきらめてしまい、つぶれて行く人、いろいろな人がいます。生まれつき才能がある人は、九十九%の才能と一%の努力とよく言われますが、そんな人は勝てないと思います。

みんなが勝ちたいと思って練習をし、その中でも一番を目指している人は、一番の練習をしているから勝てるのだと思います。努力もせずに勝てる人なんてないと思います。オリンピック選手だって、才能だけでは勝てないと思います。人並以上の努力があるからこそ上を目指す事ができるのだと思います。

私はまだ一番を取る練習もしてなければ、人並の練習量しかこなしてないと思います。だから結果もついてこないし、勝てないんだと思い知らされました。でも、このまま腐って終わりたくないの、人より、もっともっと努力したいと思います。

やっぱり才能があるからと言って努力もしないで勝てる人なん

ていないと感じました。最後には努力した者が勝つ、「努力に勝る天才なし」と言うことわざも「秀でて実らざる者あり」と同じ意味だと思います。努力するからこそ努力した者だけが勝ち取れる物があるのだと教えられました。なので、どんなに才能があったとしても、努力してきた人には勝てない、かなわない、と言う結果になると思います。

才能も大切だと思いますが、才能がなくても努力一つで成功できる人、勝てる人、ものにできる人。努力と言う行動は、とても大切な事だとわかりました。何事も、努力しないと結果は出ないとわかりました。才能とはほんのわずかだと思います。一%の才能と九十九%の努力だと思います。

「苗にして秀いでざるものあり」

岡田 潤

この『論語』の意味は、せっかく芽が出ても成長しない人もいる、という意味だ。私はこの論語の意味を知ったとき、部活の弓道の事を思い出した。

私は高校に入ってから弓道を始めた。ほとんどの人が弓道を高

校から始めていたので、皆スタートラインは同じはずだった。しかし私は、高校に入學してから一週間で左ひざをけがしてしまい、他の人より一ヶ月もスタートがおくれた。たかが一ヶ月ともいえるが、自分はまったく何も知らない状態、周りの人は皆、競技のルールや基礎を覚えている状態であり、まさに絶望した。自分に才能があつたらいいと何度も思った。

周りよりも遅れたスタートのせいか一年目はあまりやる気もなく終わってしまった。しかし自分も二年生になり、周りのチームメイトが次々と活躍をしていた。それを見て私は、「自分も活躍したい」と思うようになった。それから私はたくさん努力をした。部活の弓道をするためにだけ学校へ行く時もあった。時には夜十時すぎまで残って練習をした時もあった。その努力がなかったら今の私はこの大学にはいなかったし、弓道も続けてはいなかったらろう。努力の大切さをものすごく身感じた。

その努力のおかげかどうかかわからないが、高校三年生の時には夢にまでみたインターハイへと出場することができた。インターハイでの結果は良いものではなかった。もっと早くから努力していればと思えた。

インターハイの全国制覇ができなかったので私は大学でも弓道 continue、そこで全国制覇をしてみたいと思い、この大学へと入学

した。そして今も毎日の練習をがんばっている。

だれかが言っていた「一パーセントの才能と九十九パーセントの努力」、まさにその通りだと思う。そして孔子もこういう「苗にして秀いでざるものあり」、まさにその通りだ。努力をすることはとても大切な。私はこのことを高校三年間で学んだ。だから私は孔子のこの言葉が好きだ。

今の世の中で、この言葉に気づくことができるのはごくわずかなと思う。やっぱり孔子はすごい。だから今の世の中ではさまざまな『論語』の意味を知ってもらいたいと思う。『論語』が今の世の中に浸透すれば、もっと住み良い世の中になると私は思った。私は『論語』のすばらしさをもっと広めてほしいと思う

広めるためにもやっぱり努力は必要だと思う。また私は努力しようとするのが才能なのではと思う。きっと孔子もたくさんの方の努力をしていたから、今の世の中に語りつがれているのだらう。

私もこれからの大学生活で、今まで以上に勉強と部活の弓道を努力したい。孔子のように。そして自分の夢である全国制覇へと向い、きょうもまた頑張りたい。自分の苗に努力という水をまき、きれいな花をさかせたい。



「未だ生を知らず 焉んぞ死を知らん」

高橋 萌

これは「生きることばむずかしい。まだ生きることがわからないので、死の意味などとてもわからない」という意味である。

「生きることばむずかしい」……まったくその通りであると私は思う。ここ数年、自殺希望者或いは自殺者数が増加傾向にあるらしい。一人一人の理由は違っても、生に追い詰められた人間というものは、死に救いを求めるものらしい。

私自身も論外ではない。齢十八にして人生が嫌になった回数は何え切れないほどある。まだケツの青いガキが全部知ったような口を利くんじゃねえ、と思うかも知れないが、人間関係でなんらかの問題が生じると、すぐ、「死」に助けを求めたくなる。もう何も考えたくない。消滅したい。過去においても現在においてもその考え方は変わらないし、それを变えようとも思わない。

そのような人生を歩んできたため、「死」とは一体なんなのだろう、と思うことがよくある。「死」とは救済であり、無であり、闇であり、消滅であり、未知の世界へ通じるもの……。結局のと

ころ「死」の意味は誰にもわかることはないだろう。しかし、人はそれぞれ「死生観」をもっており、それは一人一人違うものであると誰かが言っていた。私の場合、「死」とは「救済」である。浮世のしがらみや呪縛から自身を解き放ってくれる唯一のもの。

私の考える世界には神や仏などという存在はおらず、「救済」は「死」そのものである。

人によってはこの思考を「危険なもの」と言っている。それはドラマや漫画によくある、自殺を実行しようとしている者に向かって「早まってはいけない！」と止めに行く。「生きていればきつといいことがある」「家族が悲しむだろうからもっと生きなければだめ」などと声をかける者もいるが、自殺を実行しようとしている者にそのような言葉を受け止める心の余裕などないだろう。又自殺希望者は散々悩んだ挙句、その行動（命を絶つこと）を選択したのだ。それを止めるということは相手の「死生観」、つまり「考え方」を壊すことに繋がると私は考える。

地上に生きている人間を含む生物が、今この瞬間にも体験している「生」は、「死」とは異なり、自らの身体を以って体験できる。しかし、「死」は身体そのもので体感することは不可能である。九死に一生を得た、という人であっても、実際に「死」を体験したとは言えない。何故なら、本当の「死」を体験したその瞬

間、その者は既に身体を失っているのだから。

「何故私たちはここに生きているのか」「何故私たちは生まれ、死ぬのか」……この謎は半永久的に解けることはない私は考える。結局、「思考能力」を自然の摂理として与えられた人類は、この先もずっと「生死」に関する謎を解明するべく生き続け、やがて死んでいくのだろう。意味などなく、「生死」への意味づけを行うという行為さえ無意味、ということもあり得るかも知れないが。

私は社会福祉学科に所属しているため、「ターミナルケア」等々、「生死」に纏わる授業を受けている。このため、将来他人の幸せ（生死）を担う「福祉」に従事する以上、この「生死」というものを深く理解する必要があるといつも感じている。

現世に追い詰められると「死」に救いを求める私であるが、私自身、「生」の意味も「死」の意味をも知る術は無い。しかし、今はこの時をこの場所で過ごすしかなく、それが私の「生」であり、それが私であるのなら、私は私の人生である「今」を、よりよく生きようとするほかは無い。

「生きることはむずかしい。まだ生きることがわからないので、死の意味などとてもわからない」……そう孔子が説いたように、「生」の意味など、ましてやその遥か先にある「死」の意味など、

私たちには到底わからない。しかし、難しいからこそ、それに挑戦するのであるし、わからないからこそ、その意味を追求するのが人間という生き物である。孔子のこの言葉を胸に、今は自分にとってよりよい「生」の追求をしていきたいと思う。

「性相近きなり習相遠きなり」



熊谷 真 宏

意味は、誰でもお互い似たようなものであるが、習慣や育ち方によって人間が変わってしまう、というものである。

高校での体育の授業の前のことであった。授業の一時間前、ジャージに着替えていた時である。一人の女の子が、脱いだ制服を脱ぎっぱなしにして床の上に置いたままにしていた。私は、その様子を見て驚いてしまった。なぜ、脱いだ制服を畳むことができないのだろうか疑問に思った。そこが綺麗で、ほこりひとつ落ちていない床であるならまだしも、沢山の人の出入りが盛んな教室である。ほこりや汚れが沢山ある。そのような場所に平気で置いてしまっている不潔さと、周囲の人に対する迷惑を考えた。

その時考えたことは、その人の生活習慣であった。家でもだら

しがなく、日々の生活を送っているのかと思った。幼い頃から誰もが、脱いだ洋服の整理整頓については言われているはずだ。ましてや制服のように毎日着るものであるならば、清潔にしておかなければいけない。なにもかも面倒だと考えていると、だらしない人間になっていくだけである。

また、最近未成年による非行や暴力事件が多くある。なぜ、相手を傷つけたり、裏切ったりするという行動をとってしまうのか。その背景には、育ち方が挙げられるのではないだろうか。よく幼い頃から、暴力を振るわれていた子は、大人になると自分の子供にも暴力を振るってしまうという話を耳にする。また、両親から愛情を注がれてこなかった子供は、相手を信じるのができなくなり、常に相手の裏の心ばかりを読むようになるという。

人それぞれの育ち方には、違いがある。それは当たり前である。しかし最後に変ろうとするかどうかの決断するのは自分自身である。

私は、この『論語の』言葉を生活をしていく上で取り入れていくべきであると思う。なぜなら、年齢を重ねることによって、忘れがちなことや、当たり前になってしまっていることが必ずあるはずだ。そのような時に、今の生活習慣や環境が果たして適切なものであるのかどうかを自問自答できないだろうか。

「その身を正しくすること能わずんば 人を正しくすること如何せん」

村上 遥

「自分の行いを正しくできなければ、人を正そうとしてもしょうがない」という意味です。自分の生活を振り返ると、私は他人に嘘をついたことがたくさんありますが、自分が嘘をつかれるのは嫌いです。だから他人に「嘘をつかないでほしい」と言います。しかし、自分の場合を考えると、自分は今まで何度も友達や先生、親に嘘をついたことがあります。私はこの『論語』を読んで自分が矛盾していたことに気がつきました。そして「他人に嘘をつかれたくないのなら、自分が正直な気持ちを持って相手に接しなければならぬ」と感じました。

もう一例を挙げると、私は大学の大学受験や就職試験に「頑張れ」と言うことがよくあります。今までたくさんの友達や姉妹に「頑張れ」と言っていました。しかし、この『論語』を知り、今までの自分の行ってきたことを考えると「自分は他人に頑張れ」と言えるほど頑張っているだろうか、と疑問に思いました。これから、他人に何かを言うときには、自分がそれだけのことをして

から言おうと思います。

このことばから「自分の行動が正しくなければ相手に何を言っても説得力がない」ということがわかりました。自分の行動をきちんとするということは、人間関係を築いていくうえでとても大切だと感じました。



「曾子曰わく、吾、日に三たび吾が身を省みる。人のために謀りて忠ならざるか。朋友と交わりて信ならざるか。習わざを伝うるか」

張 晶

私は、毎日何度も自分自身のことを反省する。人の相談にのってあげて、真心を尽くさなかったことはないか。友達との交際に誠実でなかったことはないか。教わったことをよくおさらいもせずに、語り伝えたことはないか、と。

これは、人間の本質、内実をあらわしたもので、「忠」とは「心」の中（まんなか）、中心、すなわち忠である。「信」、これは、内実のあることを意味する。真、実、誠などみな同じで、内実の

あることを孔子は常に求めたのである。

私はこの文章を考えたとき、誰もが持つ人間の弱さ、本質を、三種類の反省として示したのだと思った。人間は、どうしても自分勝手になりやすく、自分本位に物事を判断する。また、自分の損得ばかりをまず考えてしまう。相手が親であろうと、兄弟であろうと友人であろうと、他人であろうと、自分をまず優先に物事を判断してしまう。

私自身、大学に入学しようと計画をすすめていたとき、以前から大変お世話になっていた方から、仕事の紹介を受けた。本当は二ヶ月ほどしか働けないのに、入学に必要な資金を得るため、その事実をかくしてその仕事を受けてしまった。今では後悔している。お金のためとはいえ、大切な人を騙してしまったからである。

私は、『論語』はもちろんだが、仏教も信仰している。仏教でもやはり、生き方について同じようなことを表している。自分に對して諫める気持ちを、いつも忘れないようにしなくてはいけないし、他人に對して、不誠実であってはいけない。また、親兄弟はもちろん、自分とは無関係と思っている多くの人たちに對しても、感謝の気持ちを持つことを教えている。わたしが『論語』のこの一節を選んだのは、私の信仰とよく似ていたからである。

どれも、いうのは簡単だけれど、実際に自分でやってみると、

たまにはできても、その日の気分とか、体調、またその相手によって、なかなかできないのが本当である。私が受けているほかの科目に福祉関係のものがあるが、内容の原点は、まったく同じで、『論語』や仏典の教えに他ならないと思う。

孔子の教えも釈迦の教えも、まず人間の形成であって、最も重要なことを教えてくれている。特にこの『論語』の一節は、一日の間に何度でも自分自身を反省し、自分の甘え、身勝手さ、欲などを、十有るものは九に、一つでも少なくするように、そういう気持ちを忘れさせないようにする教訓だと思う。完璧には到底できないが、日、一日反省の気持ちを、持ち続けたい。



「仁に志せば 悪むこと無きなり」

杉 山 亜 美

意味は「人を愛することにつとめれば悪いことはしないでしよう」です。なぜこれを選んだかというと、今の時代の日本人に足りない事だと思ったからです。

最近テレビのニュースなどで子供を虐待したり、人を殺したりという事件をよくみます。「子供がいなければ自分はもっと良い

生活が送れていた」とか、「なんかむかついたから殺した」など、自分勝手な理由ばかりです。私は、それをみた時にとても悲しくなり、そして私自身が「むかつき」ました。自分もその時は、その事件をおこした人の事をなぐりたくなりました。私は、この文のように、人を愛することができれば、人を殺してしまうなんて事件はおこらないだろうと思いました。虐待をしている親も、子供に対して、「生まれてきてありがとう」という気持ちをもっていれば、絶対に虐待という行動はおこらないと思います。

「むかつく」という理由で人を殺してしまう人は、その人自身が人からいじめをうけていたりなど嫌な思いをしているから、そういう気持ちが出てくるのだと思います。その人がいじめなど受けていなければ、そういう行動はおきなかったと思います。いじめをした人も、その人の事をもっていれば、いじめなんてしなかったと思います。

一人一人がみんなを愛する事ができれば、こういう事件などはおこらないのではないかと思います。人が人を愛して、愛される事によって幸せになっていけるはずです。私は、自分自身の気持ち「幸せ」な人が悪い事をするとは思えません。私はこの文の意味を今回のように、深く考えた事によって、人を愛する事がどれだけ大切かということをあらためて知ることができました。

私の家族は、みんな仲が良く笑顔が絶えません。私自身みんなの事が大好きです。こんな自然な事が、どれだけ自分にとって支えになっているのかということを知る事ができました。もし、会話もなく冷めた家族だったら、自分はどうなっていたんだろうと思います。

こんな大切な事を知ることができて本当に良かったです。

「人の己を知らざるを患えず 其の 不能なるを患うるなり」

酒井 勇 志

意味は、自分が人に認められないことを嘆くより、自分が認められるだけの能力がないことを嘆きなさい、というものです。私なぜこの文を選んだのかというと、高校の時に、このようなことを私自身思っていた時があったからです。

私は中学を卒業した時に、親元をはなれて山形県の高校に進学しました。理由は、小学校から続けてきたサッカーを最もレベルの高いところでやりたいと思ったからです。中学三年生の時に、山形のユースチームのテストを受け、合格した時にはびっくりし、

信じられなかったのを覚えています。それで、進路を決める時も、県内の高校に行こうとも思いましたが、山形へ行くことを決めました。

ユースチームでのサッカーは、部活とは全く違うものでした。みんなプロを目指して来ている人達ばかりで、毎日毎日が競争でした。私は中学三年生の時は、県大会に優勝して、東北大会にも出ていたので、自分に自信を持っていました。しかし一年目は、練習について行くことさえやっとで、試合になど全く出場することはありませんでした。すごくやさしかったのを覚えています。私が高校二年生の時、練習の成果のおかげで、ようやく試合に出ることができました。何回もやめようかと思った時もあったので、心の中でほっとしてうれしかったです。

しかし私が三年生になって、自分達が主体になった時、私はあまり試合に出場することができませんでした。自分自身は、調子も悪くはなく、練習試合や練習では、いいプレーができていました。それでも、試合に出ることは全然できませんでした。それだけではなく、試合のメンバーに入ることさえできなくなってしまいました。三年生で自分達が主体なのに、一・二年と試合を見学している日も少なくありませんでした。今まで積極的にやっていた自主練習なども、次第にやらなくなっていました。試合に出ら

れないのは、監督が悪いと思い始めました。

「なんで自分が試合に出られないのか」と考えるたびに、「監督がえこひいきをしている。自分のことは嫌いなんだ」と思い、原因を全て、自分ではなく監督のせいにしていました。そう思いながら一年間を過ごし、結局三年生の時はほとんど試合に出ることはありませんでした。今考えると私は、少し天狗になっていたんだと思います。天狗になっていて自分自身のことを冷静に振り返ることができなかったんだと思います。

大学に入学して、授業でこの文を読んでも、自分自身を反省することができませんでした。本気で取り組んでいるからこそ、まわりの人に認められたいと思っているのだと思います。でも認められない時の方が多いのです。でもその時に、自分の実力を良く見直して、認められるまで努力していくことが大事なのだと思います。

これから大学でサッカーをしていく中でも、社会に出てからも、自分自身が認められない時や、思い通りにいかない時もあると思います。そんな時は、この章句を心において、がんばっていきたいと思います。

「吾日に吾が身を三省す」

桃井美樹

この言葉の意味は、「私は毎日自分のしたことを反省します」です。これは、すごいことだと思います。その日、毎日毎日、自分のした行動の反省をするというのは、本当に意識しないとできないと思います。しかし、毎日反省することにより、明日から自分をもっと徳のある行動や、後悔をしない行動をすることができ、人生をより良いものにできると思います。

私は、これまで様々なことにチャレンジしてきました。その中で一番がんばってきたのは、中学でやっていた部活動です。吹奏楽部に所属していた私は、毎日ただ必死に練習するばかりでした。時々、外部から講師の先生に来てもらい、いろんなことを学びながら、自分にとってためになると思うことを聞いて、覚えておき、個人の時間になったときにその覚えたことを練習していました。

しかし、今思い返せば、反省していたことは、とても少ないように感じます。毎日目標を立て、その目標に達したら自己満足していたように思います。反省したといえ、顧問に指摘されたところだけに限られていたような気がします。たぶんそれが、当時

の私にとってあたり前のような感じになっていたんだと思います。自分のやりたいことばかりをやっていて、やらなければならないことから目を背けているような気がします。

毎日、同じようなことの繰り返しに慣れてしまい、反省をしなくても「どうせ明日も…」という思いがあるから、「反省しないとな」と思ったとしても、しないで、そのまま、同じ生活をしているんだと思います。

でもこれからはこの言葉をいつも頭において、これからの人生、生活を後悔しない生き方や、責任のある行動を心がけたいと思います。



「故きを温ねて新しきを知る」

久保田 勇輝

この意味は、古い事を研究すると新しいことがよりよく分かる、という意味です。この句を選んだのには、理由が三つあります。

まず一つ目は、中学二年の時に新潟県中越地震を経験したからです。私はこの地震を中学二年の時に体験し、自分の体自身でこのように大きな地震を感じたのはこれが初めてでした。この中越

地震が起きた後も、中越沖地震といった大きな地震を体験しました。

二つの地震を体験したことで、学校の授業でまた地震について調べる事になりました。その時、調べた内容は学校で習ったことの他に、知らなかったことが何個か調べて分かりました。

そして私が東日本国際大学に入学してから初めて、基礎演習のゼミで自分が今、気になっていることを調べてレポートにまとめ、という課題が出た時、何について調べようかと思った時、もう一度地震について調べてみようと思いました。地震については前に調べた内容を少し利用し、その他分からないものに対してはコンピュータを使い、ホームページで調べながらレポートを作成しました。

レポートを作成している時、前に地震について調べたことをもう一度調べたことによって、新しい地震の情報であったり、分からなかったことが前よりもよく分かるようになりました。その時これが「故きを温ねて新しきを知る」ということなんだなあと思いました。

二つ目は高校二年生の時のことです。授業中に先生が、「自立とは何か」といきなり生徒に聞いてきたことです。その時私は、「自立」って何なんだろうとずっと考えていて、先生の質問に答え

ることができませんでした。それから私は、「自立」という言葉を辞書で調べました。

調べた結果、「自立」には二つあることが分かりました。それは、「自立」と「自律」という言葉の二つです。意味としては、「自立」は、他の援助や支配を受けず自分の力で身を立てることと書いてありました。「自律」には、自分で自分の行為を規制し、外部からの制御から脱して、自身の立てた模範に従って行動すること、と書かれていました。この意味から、私は自立というものは、自分の力で誰からも助けを借りずに、模範に従って行動し、立つことなんだなあと思いました。

先生の質問の答えが分かった次の日に改めて家に帰って、コンピュータでホームページのヤフージャパンを使って「自立(自律)」について調べてみた所、自立と自律はあまり変わりがないということが分かりました。簡単に言う则自分て立つのが自立で、自分で律するというのが自律という意味が書かれていました。

最後の三つ目は部活動でのことです。私は高校三年間、バレーボール部に所属していました。私がバレーボールを通して「故きを温ねて新しきを知る」と感じた時は、バレーの試合でした。それは、毎年代々木体育館で行われる春の高校バレーボール大会に向けての県大会のことでした。毎年この大会に向け、私たちのチー

ムはいつも決まって強い高校に準決戦で当たり、そこで負けてしまします。

そこで私たちのチームは、相手チームの研究・分析をすることになりました。分析の内容は、相手チームをビデオに録画して、相手のフォーメーションやサーブの特徴、打ち方やコースを部員全員で話し合ってまとめました。次に、体育館に場所を移動して相手チームの背番号をつけて相手のフォーメーションを作り、スターティングメンバーの人がどの人を狙って、どの人がどういうボールを苦手とするかをチーム全員で話し合いました。そして、チーム全員で「打倒強豪校」と目標を決めて、毎日、毎日練習にはげみ、体が痛くなるまで練習に力を入れました。県大会の日になり私たちのチームは順調に勝ち進んでいき、ついに、因縁の高校との試合になりました。

その試合は私たちが分析した通りのメンバーで臨んできました。自分たちは少し安心しました。第一セットは、私たちのチームが相手チームを圧倒して先取しました。休憩の時にもう一度、相手チームのフォーメーションを確認して第二セットに望みました。第二セットでは、私たちの連続ミスなどで少しずつ点数が離れていき、結果は惜しくも負けてしまいました。

第三セットになって私たちのチームは徐々に集中力がきればじ

め、どんどん相手との点数が離れていってしまいました。私は、選手に試合はまだ終わっていないと言い、チームを盛り上げようとしたが、試合は負けてしまいました。

相手チームを分析・研究をしたからといって実際にチームと戦えば違うということですが、これまでのことを分析する、知るところとは、はじめの一步であるということも分かりました。

「教え有りて類無し」



青 砥 弘 泰

人は、教育の仕方次第で、善くも悪くもなるものであり、初めから善人や悪人という類別はないものである。という意味である。私は深夜のコンビニでのアルバイトから、生活のリズムが一般の人の生活（行動）から大きく逸脱してしまい、完全な形で昼夜が逆転した生活を送るようになってしまった。

学費や生活費を稼ぐ為に始めた筈だったが、その意味・意義をいつの間にか見失ってしまい、学業を疎かにし、昼は寝、夜は働くという生活をしていた。

私がこの章句で痛感したことは数知れない。小学校・中学校の

時代にも色々な人物に出会った。いじめる者、いじめられる者、勉強だけしている者、スポーツしかない者、まず学校で見かけない者、徒党を組んで、溜飲を下げる為に陰口を言う者、孤独主義の者がいたり。先生の対応もそれぞれ違っていたのを覚えている。

高校に入り、進学しなかった人や退学した人。仕事が続かなかったり、逮捕されたりした人。彼らが学ぶ事（進学）を選ばなかったり、投げ出してしまった事は、彼らが選んだ人生の形ではあるが、裏を返せば、彼らに人の意見を聞き入れる教育をしていれば、私と何も変わらない普通の青年になっていたのではないかと考える。学校という所は、中学校までの義務教育では、人格形成や教養という重要な面を占めているし、家庭や友人関係、生活環境以外での成長の場でもある。それぞれ色々な経験をしながら成長していく。

一方、世界に目を向けると、悲惨ともとれる教育が行われている。教育はおろか食事すらままならない国もある。教育まで行き届かない国では、学校以外での経験がそれらの国の人々の行く末を反映してしまう。ある地域では銃を握らされたり、体に爆弾を巻きつけて自爆テロをする少年少女もいる。彼らが受けた教育はその地域の住民・宗派による彼らの考えの中では、正義であり善

である。

彼らの善は世界と比較してもハッキリと悪とは判断しかねる。人によって善悪は違い、それは地域の風習によって違ったり、国による文化によっても違う。大人が子供を敵の「的」にしたり、敵を子供だからと油断させ、子供に自爆させたりするのが真の正義、正しい教育だとは到底思えない。

一方教育熱心な国では勉強によるノイローゼや鬱に陥る者もあり、学業の面での教育の不足や充足によっても、善悪のポーターラインの位置が変わってくるのがわかる。

世界での教育や日本国内での教育は、共通点もあるが相違点が多い。学校教育以外の点からも人が成長する状況はあまりにも違い過ぎており、現実味すら感じない子供もいる。世界には歴史・文化・国・地域・人種・宗教・哲学がそれぞれ存在し、それから沢山の考えが生まれ、形となって、世代がかわっても残り続ける善と悪が存在し、様々な善悪が生まれ続ける。人を人として育むには、育む側が正しいと思えても、受け手の将来や未来を考えた上で大切に思っしてほしい。

「教え有りて類無し」という言葉やその意は、世界中に知れ渡ってほしい。この言葉はどんな人にも必ずあてはまるはずである。そして、人に影響を与える人が、この言葉を心の隅に置いておけ

ば、きっと善悪の分岐点に立っている人を、しっかりと考えさせられると思う。そして相互の価値観が、世界的に正しいとされる方向に向かっていくと思う。



「その身を正しくすること能わずんば人を正しくすること如何せん」

中道 一江

この意味は「自分の行いを正しくできなければ人を正そうとしてもしょうがない」となっている。

これは論語カルタにある省略形のもので、正式な文をしらべてみた。すると「子曰く苟も基の身を正しくせば政に従うに於て何かあらん。其の身を正しくする能わずんば、人を正しくするを如何せん」であり、意味は「孔子がいうには、もし身の行いを正しくするならば政治を行って国を治めるのに何の難しいことがあろうか。もし己の身の行いを正しくできなければ、どうしても人を正しくすることができよう。」であった。

もっと分かり易い意味は、「言動が一致してなければ信頼できず、面従腹背となっていき、問題が多発する。自分の行動を律す

るようにしよう。そうすれば、口数はいらなくなる。」ということであった。

私は、政治を行ったり、ある組織で人の上に立つという立場では全くないが、日頃の生活を振り返ってみると、まさに口先だけの人間のように思えてきた。私自身二児の母親で、子育て真っ最中である。日常生活の中で子どもに注意することは数多くある。

使ったものは、元の場所へ戻しなさい。食事中に食べ物をちょっとでもこぼしたのなら、テレビばかり見ているからだ。登校時間ギリギリになって慌てていると、余裕をもって起きないからだ。と、思い起こすときりがなくらいだ。そして毎日同じことを言っている。ということは、子ども達に、母親である私の言葉は伝わっていないことになる。

そんな時に授業の中でこの『論語』を学んだ。「自分の行いを正さなければ人を正そうとしてもしょうがない。」という意味を知って、胸にグサリときた。私が今まで子どもに対して口うるさく注意してきたことを、自分自身は実行しているのだろうか、と考えてみると、決してそうだとは言えない。

例えば、何気なく、大切なプリントをその辺に置いて、いざという時はその場所を忘れてしまい、挙句の果てには子どものせいにしたり。忙しいことを理由に、家事をしながら朝食をつまんで

うっかり食べこぼしてしまった、ということはいしょっちゅうである。その現場を、子どもが目撃すれば当然「お母さんだって行儀が悪いじゃないか。」と指摘してくる。そうすると私は、何も反論できない。自分が失敗していることを子どもに偉そうに注意しても、説得力などあるわけがない。まさに、「その身を正しくすること能わずんば人を正しくすること如何せん」である。自分の行いを反省しつつ、以前私が働いていた職場のことが思い出された。

そこは製造業だった。見た目に関して、とてもうるさい職場だった。部品の置き方も、作業者の作業しやすさはほとんど聞き入れられず、まず見た目で指摘された。皆それに従っていたが、たまに本来あるべき場所からずれて物が置かれていると、厳しく注意された。それはそれで納得するしかないのだが、注意をした張本人が、忙しいことを理由にとんでもない所に物を置いていたりする。その人物は上司なので、そのことをとがめる人達が面従腹背の職場であった。もちろん、お世辞にも良い雰囲気とはいえなかった。

誰しも、言動不一致なことを堂々とやっているわけではないと思う。きっと「ちょっとぐらい」という気持ちの緩みから起ることなのだ。しかし、人を正そうとして言ったことならば、そこを

ぐっと思ひ留まって、言動が一致した人間であるよう努めなければならぬ。自分がそういった努力をコツコツと積み重ねてこそ、周囲の信頼が得られるのだと思う。

四月から『論語』を学び始めるまで、私は孔子のことはほとんど知らなかったが、学習が進むにつれて、『論語』の深さが段々と分ってきた。一見難しそうな感じがするが、その意味を考えてみると、自分達の生活にとっても身近で、自然と今までの行いを省みることができる。孔子は、常に人々が皆仲良く平和に暮らしていくことを望んでいたのだと思う。また、争いが絶えない世の中に存在していたからこそ、このような素晴らしい『論語』が生れたのではないかと感じた。

今日、百年に一度といわれる不況の中で、仕事がない等の理由での犯罪が度々起きている。そして児童虐待の問題も深刻だ。紛争やテロも後を絶たない。そのような罪を正当化している人達の心に『論語』が響いてほしい。そしていつか世界が平和になってほしいと思う。まずは、私自身がこれからの人生を、『論語』を心に刻んで生きていこうと思う。



「労して怨みず」

大橋 佑 矢

意味は、いやなことであっても不服そうな顔をしない、です。人生は良いことばかりではなくて、いやなことばかりです。したくないことをしないといけない時や、自分が不快に思うようなことをされたりする時が沢山あると思います。それでも、いつも笑顔で不満な顔一つせずにがんばっている人はすばらしいと思います。

私はいつもいやなことがあるとすぐ顔に出してしまいます。私はそのいやなことをいつもひきずってしまい、周りに迷惑をかけてしまったりします。しかし、ささいなことでイライラしたり、周りに八つ当たりしていたのでは人間として成長しません。私は広い心と、前向きな考えを持てるような人になりたいと思っています。

私は小学四年生の時からサッカーをしています。サッカーは団体競技なので周りの人に迷惑をかけてしまうようなことが沢山あります。人に傷つくようなことを言われることも沢山あります。きらいな練習メニューなども沢山あります。しかし、それらにい

つもいつも気を使い深く考えてしまっているのは、時間の無駄だと思いました。サッカーの監督に言われたことがあります。

「一人がマイナスのオーラを出してしまうとみんなにそれがうつってしまう」と。プラスのイメージを持続けることは自分のパフォーマンスのアップにもつながるし、周りの人にも良い影響を与えるのだとわかりました。友達にサッカーが上手い選手がいて、その人は悩みがなさそうなくらいいつも笑顔で、練習に対してもいつも積極的に取り組み、周りに良い影響を与えていました。

そのような人は本当に悩みがないわけではなく、悩んでいてもそうは見せない、人間としてすばらしい人なのだと思います。私にとっていやで、やりたくないと思うようなことも、その人にとっては何でもなく、笑顔でこなしてしまうということは、すごく良いことだと思います。その人とまったく同じ一日を過ごしたとしても、私の方がストレスを感じることが多いと思います。さいなことを気にしてしまう自分がきらいで、前向きな人になりたいです。そんな人になれたら何事も良い方向につながるだろうし、良い結果がついてくると思います。

前に本で読んだことがあります。使い方をかえると、限りなく自分を成長させることができると。この「いやなことがあっても不服そうな顔をしない。」のように、いやなことでも意味をか

えれば楽しくなったり、自分のためになるのです。例えば、学校から出された宿題をすることだったり、人から頼まれた面倒なことをしなくてはいけなかったりする時に、考え方をかえるのです。考え方は人それぞれ自由で、自分のためになるように考えたりします。学校から出された宿題を普通は、面倒だからやりたくないとか、仕方ないからやるとか、いやなイメージの言葉ばかり出てきてしまいます。

でも少し考え方を変えてみると、自分のためにかかります。何事も最後までやり通そうと考えたり、将来の自分のためと考えるたりすると、自分にとっての部分が伸びてくると思います。人から頼まれた面倒なことも、考え方を変えれば自分を成長させる種になってくれると思います。

これから仕事に就き、いやなことをしないといけない時がたくさんあると思います。そんな時に、ただその仕事をこなしていくのではなく、不服そうな顔をしないことによって、前向きにすることができたり、考え方を変えることによって、さまざまな部分で自分を成長させることができると思うので、今回勉強したこと思い出して、人生に役立てていきたいと思っています。

「学びて時に之を習う 亦説ばしからずや」

團 野 美 姫

意味はというと、学んでその後、後習や練習をすると、すっかり自分のものになってくるので、とてもうれしい、である。自分なりのとらえ方は、他人から学ぶ、学ぶだけでなく実際練習をしなければならぬ。その学んだことが自分自身に生かすことができたらどんなにうれしく感じるか、である。

中学生時代のころ、私は三年間吹奏楽部に所属していた。楽器が好きだったため、毎日でもくもくと練習していた。ある日、先輩から「一人で練習して上手くなるより、周りの人の演奏を聞いて良い所を吸収して練習をした方が、もっと上手になる」と言われた。正直初めは、その言葉に対して反していた。「周りの演奏を聞く時間があったいではないか」という考えで、練習をしていた。しかし、すぐ間違いに気付かされた。

合奏していると「あなたの音は、上手いけれど、このバンドには合っていない。周りをもっと聞きなさい」と、顧問の先生に言われた。その時、先輩の言葉を思い出した。それから、周りの練

習方法にあわせて練習していった。すると、合奏の時に今までになくくらいに、ほめられてとても嬉しかった。本当に細いな体験かも知れないが、学んだことを必死に練習して、最終的にほめられた時のあの大きな喜びだけは、一生忘れることがないだろう。

次に、高校生の時のボランティア活動での話である。私は、主にボランティア活動を行うインタークトクラブ(JRC)部の部長をつとめて、某自然の家のボランティアスタッフとして、様々な活動を行ってきた。慣れるまでは失敗ばかりだった。子ども・家族・障害児・障害者・高齢者・海外の人と、広い範囲でかわってきた。一番心に残っているボランティアは、自然の家での行事「夏キャンプ二泊三日」である。

これは、小学生を対象として、障害児と健康な子をふれあわせようという目的をもっている行事である。深く考えれば、障害に對しての偏見をなくそう、となる。海でのあそび、山でのあそびと、危険度がとても高いところでの活動となっている。二泊ということで、子ども達は場に慣れて、気をつかわなくなる。とても良いことだと思うが、それぞれが自由きままに行動してしまうため、扱い方にとっても悩んだ。

そんな時に、大人のボランティアさんの行動をみた。驚くほどに、冷静に行動して、笑顔で楽しそうにしていた。一日目の夜、

その方に聞いてみた。「なぜあのように笑顔で接することができるのですか。大変ではないですか」といくつか質問した。

すると「大変だなんてとんでもない。自分は今まで何十年もボランティアをしてきたけれど、一度だってそう思ったことはない。自分の元気の源は子どもたち、高齢者たちの笑顔なんだ。よく「ありがとう」といってくれるからボランティアができるという人がいるが、違うと思う。ボランティア自身が利用者に感謝すべきなのだ。なぜなら、利用者から学ぶことがたくさんあるだろう。自分は、様々なことをボランティアの人から学ぶのではなく、利用者と接することで、ここまで活動をやっていることができたんだよ」という言葉をもらった。

次の日から、子どもたちの行動を観察してみた。本当に学べることがたくさんあった。だから、施設の方からたくさんのお言葉をもらうことができた。自分なりに成長できたと感じることもできた。今でもボランティアを行っているが、あの時、あの方に学ぶことができたから、今の自分がいると、今でも本当によかったと思っている。これらの体験から、私にとっては「学んだことを、やってみると、自分のものになってうれしい」、であった。



「子、四つを以て教う。文、行、忠、信」

那^ナ 尔^ラ 蘇^ス

私の考えでは、この四つのものをもっていれば、最も高められると思う。

「文」これは学問の意味がある。文を身につけて、知識をいっぱい学んで、高いレベルにあげることには一番の基礎だと思われる。どんな時代にも、どんな学問も知識も博く学び、吸収して、自分の物にする。広い範囲の知識を学ぶということ、自分がどんな環境になっても生きられるように、そしてどんなレベルの人とも合わせられるようにして、自分の人間関係を広げていく。世界が広がってくると世界中のいろいろなことに出会える。いろいろなものと会う「チャンス」も広がるかもしれない。

けれども「文」だけを持てば完璧、完全な人間といえるわけではない。学習したものを実践し、現場のことを、学んだ知識によって解決できるようにしなければ意味がない。

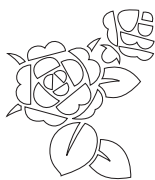
二つ目は「行」である。これは実践という意味がある。自分がどこまでできるか。どこまで問題に応じることができるか。これ

を実現した時、本当のものになれる。頭の中のものだけではなく、みんなに見えるもの、感じえるものになるように頑張ること。知識をもっている、又は、口で言うだけでは信じられない。だから知識を持つていると言うだけより、やれるということの方が大切であると思う。

三つ目は「忠」である。これは誠実の意味がある。心を正直にして、どんな時にもうそを言わない。自分が責任を持って周囲の人に迷惑をかけないようにする。

四つ目は「信」である。信とは信頼という意味である。人間としては基本的なものである。信頼がなくなったら「寸歩難行」とも言える。信頼をもらうということは、自分がいままで生きてきた人生を発揮する基礎である。どんな知識をもっている「信」がなければだれも信じてはしない。自分に信頼をおいてくれないければ、人生は孤独で、周りにはだれもいなくなってしまう。

だから社会人、人間としてはどうやって生きて行ったらよいのかと考えた時、この四つをちゃんとまもって行けば、人格も高まり、人間としての価値も高まると思う。



「己の欲せざる所は 人に施すこと 勿れ」

高野 隆 文

意味は、自分がしてほしくないことは、人にもやらない。人の身になって思いやりをする、です。これは、高校時代に、心に決めたことですが、『論語』で改めて学んだことです。

高校時代、先輩にいじめなどを受けて、とても嫌な思いをしていました。それで、私が先輩の立場になったときには、後輩には絶対に自分が受けたような嫌な思いをさせないようにしようと思いました。そして今でもこの言葉を心に刻み、大学生活を送っています。大学で『論語』を学んでみると、知っている言葉も幾つかありますが、私が思っていたよりはるかに多く、知らなかった言葉がたくさんありました。ですが、どれも為になるものばかりで、とても感心しました。

最初は難しいものなのだろうかと心配していましたが、思ったより理解しやすく、楽しく講義を受けられました。「論語を学ぶ」の講義を受けてみての感想は、自分としては初めてなので多少は戸惑いましたが、福祉の知識には不可欠なものだと思い、頑張っ

てみようと思いました。論語の一つ一つには大変な意味が込められており、そのいずれも、福祉を志す者にはとてもためになることで、私も心に染みました。

福祉に関してだけでなく、普段の自分自身にもいくつか当てはまるものがあり、振り返ってみると、納得や反省がたくさんできます。やはりどのような時でも振り返ることや、『論語』を見てもみるのも良いと思いました。

初めて『論語』の講義を聞いた時、難しく感じて、どうすればいいのかと不安な気持ちもありました。ですが、集中して取り組んでみると楽しく、様々な知識が会得でき、「君子」などについていろいろ理解できて、良い講義だと深く感じました。

今までにこのような講義が無かったのでとても新鮮さが感じられ、大学生活が楽しく感じられました。このような講義を積極的に取り入れて、福祉士として頑張っていきたいと思います。



「父母の年は、知らざる可からざるなり」

内 海 雄 太

東日本国際大学に入学して、一人暮らしを始めてから、これまでの自分の両親に対する見方が変わりました。一人暮らしをする前の自分は、いつも両親に反抗していて、言うことも聞かずに、困った時ばかり頼ったりしている、というものでした。その時は、両親に対してひどい態度をとっていることも気付かずにいました。この「親の年齢は知っておくべきだ」を初めて見た時、自分と重なるところがあると思いました。

両親には反抗した態度ばかりとっており、親孝行もしてあげることが、実家にいる時はできませんでした。一人暮らしをしてみて改めてそれを実感しました。食事の面が最初に身にしました。自分で毎朝、毎晩料理を作ることが、これほどまでに大変なことだとは知りませんでした。一人暮らしをする前は、出されたものを食べるということを、あたりまえのようにやりすぎたので、変化が大きすぎて、動揺してしまいました。

さらに、掃除の面です。実家では、自分の部屋ぐらしか掃除

をしなかったで、また戸惑いです。食事をした後の後片付け、トイレ掃除、部屋の掃除、ゴミ出しなど様々なものがあります。ゴミ捨てなどは曜日が決まっているために出す曜日を間違ってしまうとずれてしまうので大変です。

他には金銭的な面です。実家にいる時には気付かなかったのですが、実際に一番気づかされたのは、お金の大切さでした。高校の時にアルバイトをしていた時とは違った気持ちになりました。前は、全部自分でやらなければならないということがなかったで、アルバイトのお金は気楽にすぐに使ってしまうような安易な気持ちでしたが、最近では見方が変わりました。親からもらったお金や、ちょっとしたアルバイトで稼いだお金は、大切に使うようになったと自分でも感じます。これは、実家にいた頃とは全く違う感じです。

最も大変だと思ったことは、自分自身のこと、つまり自己管理です。しかしそれを実現するためには強い意志が必要です。要するに、いったん自分自身で決めたことは、つらぬきとおしていくということ。しかし、それずに一本の道を進んでいくということは、大変なことなのです。意志が弱ければ、いつまでたっても前に進めず、先延ばしにしたり、途中でやめてしまったりすると感じます。

今まで親に迷惑をかけてきたことが自分に切り換わると、今まで見たことのないように世界が広がってきて、戸惑いもありましたが、これまでのことを親に感謝しつつ、新しい世界を切り開いて頑張っていきたいと思います。

「子曰く、故きを温ねて新しきを知らば、以て師と為るべし」

S ・ K

意味は、過去のことを考え究め、それを取捨し、選択したものをもとにして、現在及び未来のことを考える、そうした考え方をする人は、他の模範となり得る人である。（伝統にばかりこだわると頑固にすぎる。過去を否定し、新しいことばかりにこだわると、時流に流される）です。

自分の意見は、日常生活の中で生活の知恵を身につけるように、学問や人間関係を通して、失敗や成功を繰り返す度に何かを学び、吸収していく、それをこれから活かして行きながら生きていくものだと思っていますので、この教えは実践しているものだと思います。

簡単な例をあげるとするならば、目的地に行くのに何通りかの道順があるとして、すべての道を通ることで最短ルートや、安全か、などを知ることになり、それもまた一つ効率良く生活して行くための知恵になると思います。これから先、何が起こるか分からない世の中で生きていく知恵を身に着け、困難に行き当たった時に助けになるのは己の経験や、知識だと思うので、過去の出来事などはとても重要なものだと思います。

「経験に勝る知識無し」と言うように、実際に体験したことは未来でとても重要な役割を果たすと思います。例えば介護と言う分野においては知識は勿論のこと、どれだけ実習を行って経験を積んだかによって能力に差が出ると思うのです。これは介護だけに当てはまるものでは無いので、出来るだけ多くのことに挑戦して、そこから有益な情報などを吸収することが重要だと思います。勿論、知識と共に実技に活かせる動作なども吸収しなければならぬのは当たり前ですが。

結局は過去にどれだけ色々な経験をしたかによって個人の能力に差が出るものだと思うので、現在の学生生活の中で色々な体験をして、今後に活かして行きたいと自分は思っています。また、過去の失敗も数多くあるので、それを考え直し、同じ間違いをしないように気をつけようと思っています。

自分は、今まで生きて来た上で、長く付き合った人間は家族以外には居ません。何故なら、小学校の時は転校が多く、友達が出来てもすぐに別れる事が多かったのです。それから友達を作ろうと思ったことが無かったこと。中学・高校と友達を作ろうともせず、いつも一人で居た自分を、周りからは白い目で見られたり、疎外されたりしたこともあって、人間嫌いになったことがあったからです。

高校では居場所も無くなってきて、通信に転籍して月一の登校日に登校して、すぐ帰って来るような生活を送っていたので、高校の三年間は孤独に過ごして来ました。

大学に入ってからはずっと友達も出来て楽しく過ごせる様になってきましたが、やはりどこかで一人になりたいと思うこともあります。過去にそれで失敗しているので、同じ間違いを踏まないようにしようと思っていますが、なかなか難しいです。

今までは、話かけられたとしても、素っ気ない返事と、機械的な返答しかしていなかったのです、ついつい話しかけられても、同じようなことしか出来ないことがある始末です。つい最近も、「○○行かない」と言う質問に対して、特に内容も聞かずに「行かない」と即答していました。

そんなことばかりしているから自分の印象が悪くなっているの

は承知していますが。本心としては仲良く過ごしたいと思っては居るのですが、なかなか上手く行きません。少しずつ改善しようとは思っていますが、思っているだけでは駄目ですね。「過去のことを考え極め、それを取捨し、選択したものをもとにして、現在及び未来のことを考える」と言うのは簡単ですが、実践するのはなかなか難しいです。

大学は四年ありますから、少しずつ改善して行きたいと思えます。そして叶うのであれば、長い付き合いの出来る友人を作って行きたいです。「子曰く、故きを温ねて新しきを知らば、以て師と為るべし」。この言葉は自分の戒めとして忘れないようにしたいと思っています。



「過ちては則ち 改むるに憚ること なかれ」

渡 邊 一 成

意味は、過ちに気づいたらあっさりとかやまりなさい、です。

この章句を選んだ理由は、過ちに気づいたら、あっさりとかやまりなさい。という章句の意味が心にひびいたからです。私は今

までに様々な過ちをおかしてきました。特に小学生のころは、過ちを犯したらごまかしたり、逃げたりしていました。しかし、いつも担任の先生に見つかり、「何で素直に謝らなかつたんですか、素直に謝れば誰も怒らなかつたんですよ」と言われていました。

私は小学生のころは謝ることが嫌いでした。私は自分が楽しいと思ったことに対しては、たとえそれが悪いことであっても、悪いことだとは思っていないからです。簡単に言う對自己中心的な小学生でした。今思うとなつかしいことのように思いますが、よく考えると性格が悪かつたのだと恥ずかしくなります。

中学生のころには今度は謝ることが多くなっていました。今度は明らかに自分が悪くなくても、謝らなくてはいけない状況になることが多かつたからです。私は中学生のころ不登校でした。理由はうつ病だったからです。しかし、学校に行かなくなった最初のころは、家族も、「何で学校に行かないんだ、どうしてそんな子になってしまったんだ」と言っていました。私はその度に「学校に行かなくてごめんなさい、こんな子に育ってごめんなさい」と言っていました。家族には謝ってばかりいました。しかし、自分がうつ病だとわかると言われなくなりました。私も言われなくなるとはっとして、うつ病が治るまで静かに過ごすことができませんでした。これも今思うとなつかしい思い出です。

高校生になると、部活動で謝ることが多くなりました。私の通っていた高校の部活動は顧問の先生が厳しい人でした。練習中少しでもミスが多いと、怒鳴りちらされました。私はその度に謝るんですが「謝っても仕方ないだろ」といつも言われました。先生からは、「自分のために練習しているんだから謝ってもどうしようもない」と説明されました。私は謝ってもどうしようもないこともあるのだなあと思いました。

このように、私は小・中・高と謝ることに関して様々な経験があります。私はこのような経験から、謝ることへの重要性、謝り方などを学びました。また、これから社会に出た時には「謝る」ということが絶対に出てくると思います。私はこのような経験を生かして、まず謝ることがないようになんばっていきたいと思います。また、今回『論語』を学習したので、『論語』の章句を生かしたいと思います。

私は素直に謝ることは良いことだと思っています。それは私の過去への経験から言えると思います。悪いことをしたと思えば、ごまかさずに謝ったほうが絶対に良いからです。そこでごまかしたりすれば、人間性として疑うものがあると思います。そのようなことにならないためにも、私が気に入った章句を活かすべきだし、普段から考えておかなくてはならないと思います。

論語素読教室

一般受講生

論語を学び

次の世代に

一般受講生 小松政男

尊敬する「仁光院殿碩徳興道孝翁大居士」大先生がつけられた「修報」という題名に心から敬意を表するものです。私こと大正生まれ。昭和、平成と八十路を大事に、学ぶ機会をいただき、「論語素読教室」に通って十有余年。熱烈に指導して下さる諸先生の教への「章句に学ぶ、孔子の思想」は、人生最高の道しるべと肝に銘じ、日々心新たに、「文学と言葉は生きている」と言わるとおり、同じことを繰返して習慣に。老いてこそ人生、と想う

ものです。

今まで子や孫に言い伝え、残してきた言葉を記しますと、

● 怒るな、威張るな、焦るな、腐るな、負けるな。人生は喜びに溢れている。それを発見するのは感謝の心である。

● 逆境にある時は自分を伸ばす機会を与えられている時である。そして躰、情操教育は家庭から（大人の）と思うこの頃です。



論語素読教室

毎月 第二、第三、第四土曜日
午後一時～二時半

於・大成殿（大学内）

受講料無料

いつからでもご参加下さい。

（かな論語進呈）

電話（代）三五一〇〇〇一（伊藤）

修 報 第十五号

平成二十二年六月

学校法人 昌平 覺

儒学文化研究所

住所 いわき市平鎌田字寿金沢三七
電話・FAX 〇二四六 二一 一六六二